

平成26年度
農薬展示圃試験設計書

平成26年3月

岩手県

[(一社) 岩手県植物防疫協会委託事業]

平成26年度農薬展示園設置一覧

※防除指針に掲載されている作物の順番に記載

対象作物	薬剤の種類	展示薬剤名 (メーカー)	対象病虫害・雑草	箇所数	実施公所 (普及セ・農大)	ページ
水稻 (移植)	除草剤	ウィナー1キロ粒剤75 (北興化学工業)	水田一年生雑草等	2	奥州 大船渡	p1
〃	〃	ウィナージャンボ (北興化学工業)	水田一年生雑草等	2	中央(地域) 奥州	p3
〃	〃	コメット1キロ粒剤 (日産化学工業)	水田一年生雑草等	2	中央(地域) 久慈	p5
〃	〃	ナギナタ1キロ粒剤 (クミアイ化学工業)	水田一年生雑草等	1	二戸	p7
水稻 (直播)	〃	オサキニ1キロ粒剤 (住友化学)	水田一年生雑草等	1	奥州	p9
〃	〃	サンバード1キロ粒剤 (三井化学アグロ)	水田一年生雑草等	1	農大	p11
〃	〃	プレキープ1キロ粒剤 (石原バイオサイエンス)	水田一年生雑草等	1	奥州	p13
水稻計		(7剤)		(10カ所)		
大豆	殺虫剤	プレバソフロアブル5 (プレバソフロアブル5協議会 (丸和バイオケミカル))	マメシンクイガ	1	中央(地域)	p15
未成熟とうもろこし	〃	プレバソフロアブル5 (プレバソフロアブル5協議会 (丸和バイオケミカル))	アワノメイガ	1	八幡平	p17
畑作物計		(2剤)		(2カ所)		
トマト	殺菌剤	アフェットフロアブル (三井化学アグロ)	うどんこ病、灰色かび病	1	八幡平	p19
ピーマン	殺虫剤	ディアナSC (住友化学)	アザミウマ類	3	奥州 大船渡A 大船渡B	p21
キャベツ	〃	ディアナSC (住友化学)	ヨトウムシ	1	大船渡	p22
だいこん	〃	パダンSG水溶剤 (住友化学)	アオムシ (キスジノミハムシ)	2	宮古 宮古 (岩泉)	p23
レタス	殺菌剤	シグナムWDG (BASFジャパン)	すそ枯病 (灰色かび病)	1	二戸	p25
ほうれんそう	〃	ユニフォーム粒剤 (シンジェンタジャパン)	べと病 (白斑病)	1	久慈	p27
ねぎ	〃	アフェットフロアブル (三井化学アグロ)	白絹病	1	盛岡	p29
野菜計		(7剤)		(10カ所)		

対象作物	薬剤の種類	展示薬剤名（メーカー）	対象病虫害・雑草	箇所数	実施公所（普及セ・農大）	ページ
りんご	殺虫剤	バイオセーフ （エス・ディ・エスバイオテック）	ヒメボクトウ	1	農大	p31
〃	〃	フェニックスフロアブル （日本曹達）	ヒメボクトウ	1	農大	p33
ぶどう	殺菌剤	フルーツセイバー （三井化学アグロ）	灰色かび病	1	二戸	p34
おうとう	殺菌剤	フルーツセイバー （三井化学アグロ）	灰星病（果実腐敗病）	1	宮古	p35
〃	殺虫剤	ディアナWDG （住友化学）	オウトウショウジョウバエ	1	二戸	p36
すもも	殺虫剤	ナシヒメコン （協友アグリ）	ナシヒメシンクイ、スモモヒメシンクイ	1	二戸	p37
果樹計		(6剤)		(6カ所)		
りんどう	殺菌剤	オンリーワンフロアブル （バイエルクロップサイエンス）	葉枯病（炭疽病）	1	中央(地域)	p38
きく（小ぎく）	殺虫剤	アクセルキングフロアブル （日本農薬）	オオタバコガ、アブラムシ類（白さび病）	1	中央(地域)	p40
きく（輪ぎく）	〃	コルト顆粒水和剤 （コルト普及会（クミアイ化学工業・日本農薬））	アブラムシ類	1	二戸	p42
花き計		(3剤)		(3カ所)		
飼料用トウモロコシ	除草剤	アルファード液剤 （日本曹達）	畑地雑草	2	中央(地域) 奥州	p43
飼料作物計		(1剤)		(2カ所)		
合計		延べ26剤		33カ所		

(水稻除草剤)

展示公所名：奥州農業改良普及センター
：大船渡農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ウィナー1キロ粒剤75 (イフェンカルバザン・プロモプチド・ベンズルフロメチル粒剤)
2. 区分 一発処理剤
3. 展示方法

※田植同時処理による一発処理除草剤としての普及性の検討
(ただし、田植え同時処理は必須条件ではない)
※SU 抵抗性雑草 (アゼナ類、ホタルイ、コナギ) に対する効果の検討
- (1) 展示場所
- (2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ハラモダカ、ミスガヤツリ、ウリカ、クワフイ、ヒルムシロ、セリ

- (3) 耕種概要

※農家慣行による、適用土壌は砂壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

(展示区)

<u>土質</u>	<u>植代日</u>	<u>苗の種類</u>	稚苗・中苗・成苗
<u>土性</u>	<u>移植日</u>	<u>育苗様式</u>	平置き・プール
<u>日減水深</u> cm/日	<u>品種名</u>	<u>移植方法</u>	機械・手植
<u>苗の草丈</u> cm(葉齢 葉)	<u>処理時の草丈</u>		cm(葉齢 葉)

(対照区)

<u>土質</u>	<u>植代日</u>	<u>苗の種類</u>	稚苗・中苗・成苗
<u>土性</u>	<u>移植日</u>	<u>育苗様式</u>	平置き・プール
<u>日減水深</u> cm/日	<u>品種名</u>	<u>移植方法</u>	機械・手植
<u>苗の草丈</u> cm(葉齢 葉)	<u>処理時の草丈</u>		cm(葉齢 葉)

- (4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

<u>展示区</u>	<u>圃場区画</u>	a	<u>調査規模</u>	m ²	カ所
<u>対照区</u>	<u>圃場区画</u>	a	<u>調査規模</u>	m ²	カ所

- (5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナー1キロ粒剤75	()	1kg	ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の一発処理剤	()	基準量	ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：田植え同時処理～ヒ[〃]エ2葉期、湛水散布、1kg/10a

※砂質土壌の水田、漏水田での使用を避ける
※散布時は水の出入りを止め、田面の露出がない十分な水深 (3～5cm) とする
※散布後7日間は落水、かけ流しをしない

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区 別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日 月 日		水稻に対する薬害		総 合 評 点
	一年生雑草					多年生 雑草	総計	症 状 程 度	収量比 対慣行	
	ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広 葉	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ					
展 示	無処理区の主要雑草 ()									
対 照	無処理区の主要雑草 ()									

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 除草効果等
- (4) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (5) 作業性
- (6) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(水稻除草剤)

展示公所名：中央農業改良普及センター (地域)
：奥州農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ウィナージャンボ (イフェンカルバザン・プロモプチド・ベンスルフロニチル粒剤)

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

※ジャンボ剤。SU 抵抗性雑草 (アゼナ類、ホタルイ、コナギ) に対する効果と、一発処理剤としての普及性の検討

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツハイ、ホタルイ、ハラオモダカ、ミスガヤツリ、ウリカ、クワアイ、ヒルムシロ、セ

(3) 耕種概要

(展示区)

※農家慣行による、適用土壌は砂壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(対照区)

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所
対照区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナージャンボ	()	小包装 (パック) 10個 (500g)	ヒ ² E 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ ² E 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の一発処理剤	()	基準量	ヒ ² E 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ ² E 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：移植直後～ヒ²E 2 葉期、但し移植後 30 日まで
※水田に小包装 (パック) のまま投げ入れる

※砂質土壌の水田、漏水田での使用を避ける
※散布時は水の出入りを止め、田面の露出がない十分な水深 (5～6cm) とする
※散布後 7 日間は落水、かけ流しをしない
※水面に藻などがいない状態で処理する

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数） 調査日 月					水稻に対する薬害		総合 評点		
	一年生雑草					多年生 雑草	総計		症 状 程 度	収量比 対慣行
	ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広 葉	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ					
展 示	無処理区の主要雑草 ()									
対 照	無処理区の主要雑草 ()									

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 除草効果等
- (4) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (5) 作業性
- (6) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(水稻除草剤)

展示公所名：中央農業改良普及センター（地域）
：久慈農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 コメット1キロ粒剤（テフリルトリオン・ピラクロニル・メタゾスルフロン粒剤）

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

※一発処理除草剤としての普及性の検討
※SU抵抗性雑草（ホタルイなど）に対する効果の検討

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツハイ、ホタルイ、ウリカ、ミスガヤツリ、ハラモダカ、ヒムシロ、セリ

(3) 耕種概要

※農家慣行による、適用土壌は砂壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

(展示区)

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(対照区)

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(4) 普及展示規模（展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する）

展示区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所
対照区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	コメット1キロ粒剤	()	1kg	ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の一発処理剤	()	基準量	ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ [〃] エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：移植5日～ヒ[〃]エ2.5葉期、湛水散布

※散布時は少なくとも3～4日間は通常の湛水状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない
※砂質土壌の水田、漏水の激しい水田、軟弱な苗を移植した水田、極端な浅植の水田、植え付けが不良で根が露出している水田での使用は避ける

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日	月	日	水稻に対する薬害		総合 評点
	一年生雑草					多年生 雑草	総計	症 状 程 度	収量比 対慣行		
	ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広 葉	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ						
展 示	無処理区の主要雑草 ()										
対 照	無処理区の主要雑草 ()										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況〔草種、残草の多少（具体的に）〕
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 除草効果等
- (4) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (5) 作業性
- (6) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(水稻除草剤)

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ナギナタ 1 キロ粒剤 (オキサジクロメホン・ピリミスルファン・ベンゾビスクロン粒剤)

2. 区分 一発処理剤 (田植同時)

3. 展示方法

※一発処理除草剤としての適用性の検討 (田植え同時処理可能)
 ※SU 抵抗性雑草 (ホタルイ、コナギ、アゼナ類) に対する効果の検討

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカ、ミズガヤツリ、ハラモダカ、モダカ、クワガリ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

※農家慣行による、適用土壌は砂壤土～埴土、散布方法は、前年の残草状況も確認する

(展示区)

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(対照区)

土質 _____ 植代日 _____ 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 _____ 移植日 _____ 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 cm/日 _____ 品種名 _____ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 cm(葉齢 葉) _____ 処理時の草丈 cm(葉齢 葉)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所
 対照区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況
展示	ナギナタ 1 キロ粒剤	()	1kg	ルビエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ルビエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の一発処理剤	()	基準量	ルビエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ルビエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：田植え同時処理 または 移植直後～ルビエ2.5 葉期 (但し、移植後 30 日まで)、湛水散布

※軟弱な苗を移植した水田、極端な浅植えの水田、砂質土壌の水田及び漏水の大きな水田では使用を避けること
 ※散布後 7 日間は落水、かけ流しをしない

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日	月	日	水稻に対する薬害		総合 評点
	一年生雑草					多年生 雑草	総計	症 状 程 度	収量比 対慣行		
	ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広 葉	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ						
展 示	無処理区の主要雑草 ()										
対 照	無処理区の主要雑草 ()										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 除草効果等
- (4) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (5) 作業性
- (6) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター・県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(水稻除草剤)

展示公所名：奥州農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 オサキニ1キロ粒剤 (イマズスルフロン・ピリミノバックメチル・ブロモブチド粒剤)

2. 区分 直播栽培 (播種同時)

※播種時処理での直播栽培水稻用除草剤としての普及性を検討する

3. 展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツハイ、ホタルイ、ウリカ、ミスガヤツリ、ヒルシロ、セ

(3) 耕種概要

(展示区)

※農家慣行による、適用土壌は砂壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

土質 植代日 播種日 品種名

土性 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種)・乾田直播

播種様式 点播・条播・散播 コーティング資材 鉄・カルパー・なし

日減水深 cm/日 落水期間 ～ (日間)

(対照区)

土質 植代日 播種日 品種名

土性 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種)・乾田直播

播種様式 点播・条播・散播 コーティング資材 鉄・カルパー・なし

日減水深 cm/日 落水期間 ～ (日間)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

対照区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期除草剤				一発処理剤			
	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況
展示	オサキニ1キロ粒剤	()	1kg	ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の初期剤	()	基準量	ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：播種時 (播種同時散布機で施用)

※薬剤処理を行ってから入水までの期間が長い場合、雑草発生の恐れがあるので対象雑草の適期内で入水すること

※SU 抵抗性の一年生広葉雑草 (アゼナ等) には効果が劣るので、これらの発生田では有効な剤との組み合わせで使用すること

※代かき及び均平化作業はていねいに行い、未熟有機物を施用した場合は特にていねいに行うこと

※砂質土壌の水田、漏水の大きな水田では薬害が発生する恐れがあるので、使用を避けること

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日 月 日		水稻に対する薬害		総合評点
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度	収量比対慣行	
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	無処理区の主要雑草 ()									
対照	無処理区の主要雑草 ()									

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（前年の栽培法も含めて具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 播種時及び播種後の水管理方法
- (4) 除草効果等
- (5) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (6) 作業性
- (7) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(水稻除草剤)

展示公所名：農業大学校

1. 展示薬剤名 サンバー ド1 キロ粒剤30 (ピラゾレート粒剤)

2. 区分 直播栽培 (播種同時)

3. 展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツハヱ、ホタルイ、ウリカ

※直播水稻 (表面播種) での効果・安全性の確認
※播種同時処理機での施用による安全性と効果
※SU 抵抗性雑草への効果の確認 (アゼナ, コナギ等)

(3) 耕種概要

(展示区)

※農家慣行による、適用土壌は壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

土質 植代日 播種日 品種名

土性 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種)・乾田直播

播種様式 点播・条播・散播 コーティング資材 鉄・カルパー・なし

日減水深 cm/日 落水期間 ～ (日間)

(対照区)

土質 植代日 播種日 品種名

土性 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種)・乾田直播

播種様式 点播・条播・散播 コーティング資材 鉄・カルパー・なし

日減水深 cm/日 落水期間 ～ (日間)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

対照区 圃場区画 a 調査規模 m² カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期除草剤				一発処理剤			
	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況
展示	サンバー ド1 キロ 粒剤30	()	1kg	ハヱ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ハヱ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行 の初期剤	()	基準量	ハヱ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ハヱ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：播種時 (播種同時散布機で施用)

※後処理剤 (一発除草剤など) との体系で処理すること

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日 月 日		水稻に対する薬害		総合評点
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度	収量比対慣行	
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	無処理区の主要雑草 ()									
対照	無処理区の主要雑草 ()									

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（前年の栽培法も含めて具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 播種時及び播種後の水管理方法
- (4) 除草効果等
- (5) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (6) 作業性
- (7) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

(様式2：水稲除草剤)

展示公所名：奥州農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 プレキープ1キロ粒剤 (ピラゾキシフェン・ベンゾピシクロン粒剤)

2. 区分 直播栽培

3. 展示方法

※湛水直播栽培における播種同時または、播種前後に使用する初期除草剤(体系処理の前処理剤)としての普及性を検討する

(1) 展示場所

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツハイ、ホタルイ、ミズガヤツリ、ウリカ、ヒルムシロ

(3) 耕種概要

(展示区)

※農家慣行による、適用土壌は壤土～埴土、散布方法、前年の残草状況も確認する

土質 _____ 植代日 _____ 播種日 _____ 品種名 _____
 土性 _____ 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種) ・乾田直播
 播種様式 点播・条播・散播 _____ コーティング資材 鉄・カルパー・なし _____
 日減水深 cm/日 _____ 落水期間 _____ ～ _____ (_____ 日間)

(対照区)

土質 _____ 植代日 _____ 播種日 _____ 品種名 _____
 土性 _____ 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種) ・乾田直播
 播種様式 点播・条播・散播 _____ コーティング資材 鉄・カルパー・なし _____
 日減水深 cm/日 _____ 落水期間 _____ ～ _____ (_____ 日間)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 _____ a 調査規模 m² _____ カ所 _____
 対照区 圃場区画 _____ a 調査規模 m² _____ カ所 _____

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期除草剤				一発処理剤			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	プレキープ1キロ粒剤	()	1kg	ヒ ^ダ エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ ^ダ エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	地域慣行の初期剤	()	基準量	ヒ ^ダ エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等				ヒ ^ダ エ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

※処理時期：播種直後からヒ^ダエ1葉期 または 播種時

※散布時は通常の湛水状態 (3～5cm) とし、散布後少なくとも3～4日間はそのままの状態を保ち、田面を露出させないこと
 ※散布後7日間は落水、かけ流しをしないこと
 ※砂質土壌の水田及び漏水田での使用は避けること

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施）

区 別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・生体）（本数）					調査日 月 日		水稻に対する薬害		総 合 評 点
	一年生雑草					多年生 雑 草	総 計	症 状 程 度	収量比 対慣行	
	ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広 葉	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ					
展 示	無処理区の主要雑草 ()									
対 照	無処理区の主要雑草 ()									

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

- (1) 前年の残草状況 [草種、残草の多少（前年の栽培法も含めて具体的に）]
- (2) 処理条件等（散布機械を含む）
- (3) 播種時及び播種後の水管理方法
- (4) 除草効果等
- (5) 薬害等（減収があった場合、薬害によるものか、雑草害によるものか、その他の理由か明記。）
- (6) 作業性
- (7) 普及性等（散布時の留意点や生産者の意見等を含めて総合的に普及性の有無を記載。）

【成績取りまとめ上の注意】

- (1) 農薬が液剤（水和剤、乳剤）の場合には希釈倍数ははっきりと表示する。
- (2) 報告は、中央農業改良普及センター県域担当の担当者が指定する期日までに電子ファイルを送付し指導を受けるものとする。

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。

作物名 大豆 対象病害虫 マメシクイガ

展示公所名：中央農業改良普及センター（地域）

1. 展示薬剤名：プレバソンフロアブル5

【有効成分・主な使用基準】

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍率	その他
クロラントラニリプロール	5.0%	収穫7日前まで	2回以内	4,000倍	

2. 普及展示のねらい

マメシクイガに対する防除効果と普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：北上市

(2) 対象病害虫：マメシクイガ

(3) 耕種概要：品種、栽植密度、その他一般管理を含め慣行とする

(4) 普及展示規模：展示区、対照区ともおおむね20 a 以上（反復なし）

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	処理量	使用方法
展示区：プレバソンフロアブル5	8月第6半旬	1回	4,000倍 100～300L/10a	散布
対照区：慣行薬剤 アディオオン乳剤	8月第6半旬	1回	3,000倍 100～300L/10a	

※両区とも紫斑病防除を同時に実施する。

※2回目防除は9月上旬にスミチオン乳剤を両区に散布する。

(6) 調査月日、方法

収穫期に1区あたり2カ所、各10茎（計20茎）を抜き取る。脱穀した後、全ての粒について被害粒を調査し、被害粒率を算出する。

4. 展示成績

供試薬剤	調査粒数(粒)	マメシクイガ	
		被害粒数(粒)	被害粒率(%)
展示区			
対照区			

5. 考察

6. 普及性

作物名 未成熟とうもろこし 対象病害虫 アワノメイガ

展示公所名：八幡平農業改良普及センター

1. 展示薬剤名：プレバソンフロアブル5

【有効成分・主な使用基準】

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍率	その他
クロラントラニプロール	5.0%	収穫前日まで	3回以内	2,000倍	

2. 普及展示のねらい

アワノメイガに対する防除効果と普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：八幡平市

(2) 対象病害虫：アワノメイガ

(3) 耕種概要：品種、栽植密度、その他一般管理を含め慣行とする

※播種期：5月20日頃

(4) 普及展示規模：展示区、対照区ともおおむね5 a 以上

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期 (1回目)	処理回数	処理量	使用方法
展示区：プレバソンフロアブル5	第一世代孵化盛期	1回	2,000倍 100~300L/10a	散布
対照区：トレボン乳剤 (慣行薬剤)	第一世代孵化盛期	1回	1,000倍 100~300L/10a	

※第一世代孵化盛期の判断は、上位葉に孵化幼虫の食痕が認められる頃を目安とする（概ね7月第一半旬頃と推定される）。

※2回目防除は、1回目防除の7~10日後（孵化揃期頃）に慣行薬剤（スミチオン乳剤）を両区に散布する。

(6) 調査月日、方法

1回目散布15日後と25日後に、1区あたり40株の主茎について、食害雄穂数、食入茎数を調査し、食害雄穂率、食入茎率を算出する。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はジアミド系薬剤であり、抵抗性害虫発生リスク低減の観点から、展示にあたっては連用しないよう注意すること。

4. 展示成績

供試薬剤	調査株数 (株)	調査穂数 (穂)	15日後		25日後	
			食害雄穂率 (%)	食入莖率 (%)	食害雄穂率 (%)	食入莖率 (%)
展示区	40	40				
対照区	40	40				

5. 考察

6. 普及性

作物名 トマト 対象病害虫 うどんこ病、灰色かび病

展示公所名：八幡平農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 アフェットフロアブル（ペンチオピラド 20%）

2. 普及展示のねらい

トマトのうどんこ病及び灰色かび病に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫 : うどんこ病、灰色かび病

(3) 耕種概要 :

(4) 普及展示規模 : 展示区、対照区とも1 a 以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) アフェットフロアブル	発病前～発病初期 (収穫前日まで)	1回*	2000倍	100～300 ^{リットル} /10a
2. (対照) 慣行薬剤	発病前～発病初期			

*農薬登録上の使用回数は3回以内

(6) 調査月日、方法

①各区2カ所の10株について、1株当たり任意の葉5枚について、発病程度別に調査し、発病葉率及び発病度を算出する。葉害は達観調査とする。

②調査時期は、散布直前、散布7日後の2回とする。

$$\text{発病度} = \{ \Sigma (\text{程度別発病葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査葉数} \times 4) \} \times 100$$

指数 0：無病徴 1：病斑面積率が葉面積の5%未満

2：病斑面積率が葉面積の5～25%未満 3：病斑面積率が葉面積の25～50%未満

4：病斑面積率が葉面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

本剤はSDHI剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から、同系の薬剤を含めて栽培期間中1回の散布とすること。

うどんこ病については、発生後の散布では効果が劣ることから、現地の発生時期を考慮して散布時期を決定すること。

4. 展示成績

農 薬 名	病害名	調査 葉数	発病葉率 (%)		発病度		薬害
			散布直前 (月 日)	散布7日後 (月 日)	散布直前 (月 日)	散布7日後 (月 日)	散布7日後 (月 日)
1. (展示) アフェット フロアブル	うどん こ病	50					
		50					
		平均					
	灰色か び病	50					
		50					
		平均					
2. (対照) 慣行薬剤	うどん こ病	50					
		50					
		平均					
	灰色か び病	50					
		50					
		平均					

5. 考察

6. 普及性

作物名 ピーマン 対象病害虫 アザミウマ類

展示公所名：奥州農業改良普及センター
：大船渡農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

ピーマンのアザミウマ類に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫：アザミウマ類

(3) 耕種概要：

(4) 普及展示規模：展示区、対照区とも1a以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	発生初期 (収穫前日まで)	1回*	5000倍	100~300 ^{リットル} /10a
2. (対照) 慣行薬剤	発生初期			

*農薬登録上の使用回数は2回以内

(6) 調査月日、方法

各区2ヶ所からまんべんなく任意の10花について、70%エタノールが入ったビニール袋に叩き落とし法によりアザミウマ類を捕獲し、成虫と幼虫別に寄生虫数を調査する。また、達観で薬害の有無を調査する。

調査時期は、散布直前、散布7日後の2回とする。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はスピノエース顆粒水和剤(スピノサド)と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意すること。

4. 展示成績

	調査 花数	散布直前(月 日)			散布7日後(月 日)			
		成虫数	幼虫数	虫数計	成虫数	幼虫数	虫数計	薬害
1. (展示) ディアナSC	10							
	10							
	平均							
2. (対照) 慣行薬剤	10							
	10							
	平均							

※薬害については有、無で記載

5. 考察

6. 普及性

作物名 キャベツ 対象病害虫 ヨトウムシ

展示公所名：大船渡農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

キャベツのヨトウムシに対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫：ヨトウムシ

(3) 耕種概要

(4) 普及展示規模

展示区、対照区とも1a以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	発生初期 (収穫前日まで)	1回*	5000倍	100~300 ^{リットル} /10a
2. (対照) 慣行薬剤	発生初期	1回		

※農薬登録上の使用回数は2回以内

(6) 調査月日、方法

①各区2ヵ所から20株について、ヨトウムシの寄生虫数(若~中齢幼虫)を調査する。

②調査は散布直前、散布7日後、散布14日後の3回とする。

(7) 普及展示上の注意点

ヨトウムシ類の種を確認のうえ、複数種が発生している場合は種別に調査を行うこと。

本剤はスピノエース顆粒水和剤(スピノサド)と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意すること。

4. 展示成績

農薬名	害虫名	調査 株数	寄生虫数		
			散布直前 (月 日)	散布7日後 (月 日)	散布14日後 (月 日)
1. (展示) ディアナSC	ヨトウムシ	20			
		20			
		平均			
2. (対照) 慣行薬剤	ヨトウムシ	20			
		20			
		平均			

5. 考察

6. 普及性

作物名 だいこん 対象病害虫 アオムシ (キスジノミハムシ)

展示公所名：宮古農業改良普及センター

：宮古農業改良普及センター (岩泉)

1. 展示薬剤名 パダンSG水溶剤 (カルタップ 75%)

2. 普及展示のねらい

だいこんのアオムシ (キスジノミハムシ) に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫 : アオムシ (キスジノミハムシ)

(3) 耕種概要 :

(4) 普及展示規模 : 展示区、対照区とも5a以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) パダンSG水溶剤	播種20~40日後 (収穫7日前まで)	1回*	1500倍	100~300 ^{リットル} /10a
2. (対照) 慣行薬剤	播種20~40日後			

*農薬登録上の使用回数は3回以内

(6) 調査月日、方法

①アオムシ：各区2カ所の25株について、中~老齢幼虫の寄生虫数を調査する。

②キスジノミハムシ：各区2カ所の10株について、根部における食害痕の有無を調べ、被害株率及び被害度を算出する。

③調査時期は、散布直前、散布10日後の2回とする。

被害度 = $\{ \sum (\text{程度別被害株数} \times \text{指数}) / (\text{調査株数} \times 4) \} \times 100$

指数 0：無病徴 1：根部の被害がわずか(数個)に認められる

2：根部の被害が表面積の25%未満 3：根部の被害が表面積の25~50%未満

4：根部の被害が表面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

飛来性の害虫であるため、展示区、対照区の散布日を出来るだけ同日となるようにすること。

キスジノミハムシ多発圃場においては、播種時粒剤使用20日後より茎葉散布を開始し、その後7~10日おきに薬剤散布を行うことで被害を少なくすることが出来る(H25研究成果)。

4. 展示成績

農 薬 名	害虫 名	調査 葉数	寄生虫数		被害株率(%)		被害度	
			散布直前 (月 日)	散布10日後 (月 日)	散布直前 (月 日)	散布10日後 (月 日)	散布直前 (月 日)	散布10日後 (月 日)
1. (展示) パダンSG 水溶剤	アオ ムシ	25						
		25						
		平均						
	キスジノ ミハムシ	10						
		10						
		平均						
2. (対照) 慣行薬剤	アオ ムシ	25						
		25						
		平均						
	キスジノ ミハムシ	10						
		10						
		平均						

※キスジノミハムシについては、収穫時の被害状況を遠観で確認し考察すること。

5. 考察

6. 普及性

作物名 レタス 対象病虫害 すそ枯病（灰色かび病）

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 シグナムWDG（ピラクロストロビン6.7%、ボスカリド26.7%）

2. 普及展示のねらい

レタスすそ枯病（灰色かび病）に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病虫害：すそ枯病（灰色かび病）

(3) 耕種概要

(4) 普及展示規模

展示区、対照区とも1 a 以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍率	その他
1. (展示) シグナムWDG	結球開始前 (収穫14日前まで)	1回	1500倍	100～300 ^g / _{10a}
2. (対照) 慣行薬剤	結球開始前	1回		

(6) 調査月日、方法

①各区2カ所から20株について、株ごとに発病程度別に調査し、発病株率及び発病度を算出する。

②すそ枯病は、散布直前、収穫直前の2回調査とする。

③灰色かび病は、散布直前、散布7日後の2回調査とする。

$$\text{発病度} = \left\{ \sum (\text{程度別発病株数} \times \text{指数}) / (\text{調査株数} \times 3) \right\} \times 100$$

発病指数

0：無発病、 1：外葉1枚に発病する、 2：外葉2～4枚未満に発病する、

3：外葉の5枚以上と結球葉にも発病する

(7) 普及展示上の注意点

本剤はQoI剤・SDHI剤の混合剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から同系薬剤の連用散布にならないよう注意すること。

4. 展示成績

<すそ枯病>

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (月 日)	収穫直前 (月 日)	散布直前 (月 日)	収穫直前 (月 日)
1. (展示) シグナム WDG	すそ枯病	20				
		20				
		平均				
2. (対照) 慣行薬剤	すそ枯病	20				
		20				
		平均				

<灰色かび病>

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (月 日)	散布7日後 (月 日)	散布直前 (月 日)	散布7日後 (月 日)
1. (展示) シグナム WDG	灰色かび病	20				
		20				
		平均				
2. (対照) 慣行薬剤	灰色かび病	20				
		20				
		平均				

5. 考察

6. 普及性

作物名 ほうれんそう 対象病害虫 べと病（白斑病）

展示公所名：久慈農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 ユニフォーム粒剤（アゾキシストロビン2.0%、メタラキシルM1.0%）

2. 普及展示のねらい

べと病（白斑病）に対する防除効果の確認及び普及性の検討

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫：べと病（白斑病）

(3) 耕種概要

(4) 普及展示規模

展示区、対照区とも1 a 以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	処理量	その他
1. (展示) ユニフォーム粒剤	は種時	1回	9kg/10a (全面土壌混和)	
2. (対照) 慣行薬剤	は種時	1回		

(6) 調査月日、方法

①各区2ヵ所から25株の1株当たり任意5枚について、発病葉率と発病株率を調査する。

②調査時期は、播種14日後、播種21日後の2回とする。

(7) 普及展示上の注意点

本剤を使用する場合、碎土を良く行った後、所定量の薬剤を均一に散布し、土壌と十分に混和すること。

本剤はQ o I 剤の混合剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から年間使用回数についての検討が必要である。

4. 展示成績

農薬名	病害名	調査 葉数	発病葉率 (%)		調査 株数	発病株率 (%)	
			播種14日後 (月 日)	播種21日後 (月 日)		播種14日後 (月 日)	播種21日後 (月 日)
1. (展示) ユニフォーム粒剤	べと病	125			25		
		125			25		
		平均			平均		
	(白斑病)	125			25		
		125			25		
		平均			平均		
2. (対照) 慣行薬剤	べと病	125			25		
		125			25		
		平均			平均		
	(白斑病)	125			25		
		125			25		
		平均			平均		

5. 考察

6. 普及性

作物名 ねぎ 対象病害虫 白絹病

展示公所名：盛岡農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 アフェットフロアブル（ペンチオピラド20.0%）

2. 普及展示のねらい

ねぎの白絹病に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病害虫：白絹病

(3) 耕種概要

(4) 普及展示規模

展示区、対照区とも1 a 以上

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍率	その他
1. (展示) アフェットフロアブル	発病前 (収穫14日前まで)	1回*	2000倍	1 $\frac{1}{2}$ リットル/m ² (株元灌注)
2. (対照) 慣行薬剤	発病前	1回		

※農薬登録上の株元灌注の使用回数は2回以内

(6) 調査月日、方法

①各区2ヵ所から20株について、葉鞘の地際部を発病程度別に調査し、発病株率及び発病度を算出する。

②調査時期は、散布直前、散布14日後の2回とする。

発病度 = { Σ (程度別発病株数 × 指数) / (調査株数 × 4) } × 100

指数 0：発病なし

1：菌糸が少量認められる

2：菌糸が多量に認められる

3：菌糸が蔓延し菌核の形成が認められる

4：枯死

(7) 普及展示上の注意点

本剤はSDHI剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から、展示にあたっては栽培期間中かん注1回、散布1回の2回以内とし、連用しないようにすること。

4. 展示成績

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (月日)	散布14日後 (月日)	散布直前 (月日)	散布14日後 (月日)
1. (展示) アフェットフロアブル	白絹病	20				
		20				
		平均				
2. (対照) 慣行薬剤	白絹病	20				
		20				
		平均				

5. 考察

6. 普及性

作物名 りんご 対象病虫害 ヒメボクトウ

展示公所名：農業大学校

1. 展示薬剤名：バイオセーフ（スタイナーネマ・カーポカプサエ）
2. 普及展示のねらい：バイオセーフのヒメボクトウに対する防除効果及び防除時期を確認する。
3. 普及展示方法
 - (1) 展示場所
 - (2) 対象病虫害：ヒメボクトウ
 - (3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行
 - (4) 普及展示規模：

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	希釈倍数	処理量
展示区 バイオセーフ	5月下旬～6月中下旬 (春処理) 及び9月中下旬(秋処理)	春処理2回 秋処理1回	2500万頭	200～800ml ただし、十分量
対照区	無処理			

処理前に糞孔の虫糞や木くずを取り除き、その後、糞孔から噴霧器を利用して薬液を注入。

(6) 調査月日、方法

処理直前に糞孔が確認される樹数を調査し、展示区の糞孔が確認された樹に薬剤処理を行う（対照区は虫糞や木くずの取り除きのみを実施）。薬剤処理14日後に糞が確認された樹数を調査する。

4. 展示成績

(1) 春処理

処理日： 調査日：

	処理樹数	薬剤処理後 虫糞確認樹数	薬剤処理後 被害樹率	虫糞未確認樹
展示区				
対照区				

処理日： 調査日：

	処理樹数	薬剤処理後 虫糞確認樹数	薬剤処理後 被害樹率	虫糞未確認樹
展示区				
対照区				

(2) 秋処理

処理日：

調査日：

	処理樹数	薬剤処理後 虫糞確認樹数	薬剤処理後 被害樹率	虫糞未確認樹
展示区				
対照区				

5. 展示圃設置上の留意点：フェニックスフロアブル展示圃とは区を分けて実施すること。

6. 考察

7. 普及性

作物名 りんご 対象病害虫 ヒメボクトウ

展示公所名：農業大学校

1. 展示薬剤名：フェニックスフロアブル（フルベンジアミド：18.0%）
2. 普及展示のねらい：フェニックスフロアブルのヒメボクトウに対する防除効果を確認する。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所
- (2) 対象病害虫：ヒメボクトウ
- (3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行
- (4) 普及展示規模：展示区、対照区ともにSS1台分とする。
- (5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	希釈倍数	処理量	備考
展示区 フェニックスフロアブル	7月上旬	1回	4,000倍	慣行散布量	
対照区 慣行薬剤					

(6) 調査月日、方法

散布前に糞孔が確認される樹数を調査する。展示薬剤散布後の9月上中旬頃に被害樹数を調査する。

4. 展示成績

散布日： 調査日：

	調査 樹数	本年 被害樹数	増減	被害樹率 (%)
展示区				
対照区				

5. 展示圃設置上の留意点：バイオセーフ展示圃とは区を分けて実施すること。

6. 考察

7. 普及性

作物名 ぶどう 対象病害虫 灰色かび病

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤名：フルーツセイバー（ペンチオピラド：15.0%）
2. 普及展示のねらい：フルーツセイバーの灰色かび病に対する防除効果を確認する。
3. 普及展示方法
 - (1) 展示場所
 - (2) 対象病害虫：灰色かび病
 - (3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行とする。
 - (4) 普及展示規模：展示区、対照区ともSS1台分とする。
 - (5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	希釈倍数	処理量	備考
展示区 フルーツセイバー	開花直前	1回	1,500倍	慣行散布量	
対照区 慣行薬剤					

対照薬剤は慣行薬剤としているが、カンタスドライフロアブルが望ましい。

- (6) 調査月日、方法

2樹を選定し、1樹あたり任意の50房（計100房）について、散布14日後に発病果房数および発病程度を調査する。

発病程度 無（指数0）：発病無し
 少（指数1）：小花穂1～2に発病
 中（指数3）：小花穂3～4に発病
 多（指数5）：小花穂5以上、果梗にも発病

$$\text{発病度} = \frac{\Sigma (\text{発病程度別房数} \times \text{指数})}{5 \times \text{調査房数}} \times 100$$

4. 展示成績

灰色かび病（薬剤散布日： 月 日、調査日： 月 日）

農薬名	調査房数 (房)	発病房数 (房)	発病房率 (%)	発病度 (指数)
展示区 フルーツセイバー				
対照区				

5. 考察

6. 普及性

作物名 おうとう 対象病虫害 灰星病（果実腐敗病）

展示公所名：宮古農業改良普及センター

1. 展示薬剤名：フルーツセイバー（ペンチオピラド：15.0%）
2. 普及展示のねらい：フルーツセイバーの灰星病（果実腐敗病）に対する防除効果を確認する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所

(2) 対象病虫害：灰星病（果実腐敗病）

(3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行とする。

(4) 普及展示規模：展示区、対照区ともにSS1台分とする。

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	希釈倍数	処理量	備考
展示区 フルーツセイバー	6月中旬 (収穫前)	1回	1,500倍	慣行散布 量	
対照区 慣行薬剤					

(6) 調査月日、方法

灰星病：3樹を選定し、1樹当たり任意の50果について、収穫時に樹上果または収穫果の発病果数を調査し、発病果率を算出する。

果面汚染：散布後果面汚染の程度について観察し、その程度を以下の符号により達観で評価する。

果面汚染の程度 ++：汚れは著しく、販売不可 +：汚れがあり販売に難がある
 ±：汚れが少なく販売できる -：汚れがない

4. 展示成績

灰星病等（調査日： 月 日）

農薬名	調査果数 (果)	発病果数 (果)	発病果率 (%)	果面汚染の程度 (-~++)
展示区 フルーツセイバー				
対照区				

5. 考察

6. 普及性

作物名 おうとう 対象病害虫 オウトウショウジョウバエ

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤名：ディアナWDG（スピネトラム：25.0%）
2. 普及展示のねらい：ディアナWDGのオウトウショウジョウバエに対する効果を確認する。
3. 普及展示方法：
 - (1) 展示場所
 - (2) 対象病害虫：オウトウショウジョウバエ
 - (3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行とする。
 - (4) 普及展示規模：展示区、対照区ともにSS1台分とする。

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	希釈倍数	処理量	備考
展示区 ディアナWDG	6月中旬 (収穫前)	1回	10,000倍	慣行散布量	
対照区 慣行薬剤					

(6) 調査月日、方法

オウトウショウジョウバエ：3樹を選定し、1樹当たり任意の50果について、収穫時に樹上果または収穫果の被害果数を調査し、被害果率を算出する。

果面汚染：散布後果面汚染の程度について観察し、その程度を以下の符号により遠観で評価する。

果面汚染の程度 ++：汚れは著しく、販売不可 +：汚れがあり販売に難がある
 ±：汚れが少なく販売できる -：汚れがない

4. 展示成績

オウトウショウジョウバエ（調査日： 月 日）

農薬名	調査果数 (果)	被害果数 (果)	被害果率 (%)	果面汚染の程度 (-~++)
展示区 ディアナWDG				
対照区				

5. 考察

6. 普及性

作物名 すもも 対象病虫害 ナシヒメシンクイ (スモモヒメシンクイ)

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤名：ナシヒメコン

2. 普及展示のねらい：ナシヒメシンクイに対するナシヒメコンの交信攪乱効果を確認する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：(昨年度と同じ園地とすること。)

(2) 対象病虫害：ナシヒメシンクイ (スモモヒメシンクイ)

(3) 耕種概要：品種、植栽距離、その他一般管理を含め慣行とする。

(4) 普及展示規模：(昨年度に準ずること。また、放任園の対策を行うこと。)

(5) 散布時期、量、方法

	薬剤名	設置時期	処理量	備考
展示区	ナシヒメコン	4月下旬	50~100本/10a	
対照区	無処理			

(6) 調査月日、方法

展示区、対照区とも5樹を選定し、収穫時に20果/樹(計100果)、合計200果の被害の有無を調査する。また、対象害虫のフェロモントラップを設置し、10日ごとに誘殺数を調査する。また、必要に応じて加害種の同定を病虫害防除所に依頼する。

4. 展示成績

シンクイムシ類 (設置日： 月 日)

		展示区						対照区						備考
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計	
収穫時 (月 日)	調査果数													
	被害果数													
	被害率	%						%						

防除実績を添付すること。

5. 考察

6. 普及性

作物名 りんどう 対象病害虫 葉枯病（炭疽病）

展示公所名：中央農業改良普及センター（地域）

1. 展示薬剤：オンリーワンフロアブル

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍数
テブコナゾール	20.0%	発病初期	5回以内	2,000倍

2. 普及展示のねらい

葉枯病に対する防除効果を確認し、普及性を検討する。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所 花巻市
- (2) 対象病害虫 葉枯病、（炭疽病）
- (3) 耕種概要 露地栽培の慣行法による
- (4) 普及展示規模 展示区、対照区とも1 a、2反復
- (5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	処理量	その他
(展示) オンリーワンフロアブル	6～7月	1回	200～300 $\frac{g}{L}$ ／10a	処理時期は葉枯病の発生をみて判断する
(対照) 慣行薬剤	6～7月	1回	使用基準による	

(6) 調査月日、方法

- ア 調査は散布直前および散布5日後、10日後の3回とする。
- イ 1区50茎について、葉枯病の発病状況を程度別に調査し、発病茎率および発病度を算出する。

$$\text{発病度} = \left\{ \sum (\text{程度別発病茎数} \times \text{指数}) / (\text{調査茎数} \times 3) \right\} \times 100$$

指数 0：無病徴 1：1茎あたりの発病葉数1～2葉
 2：1茎あたりの発病葉数3～5葉 3：1茎あたりの発病葉数6葉以上

- ウ 1区100茎について、炭疽病の発病の有無を調査し、発病茎率を算出する。
- エ 薬害及び葉の汚れを観察する。
- オ 調査期間中、他の薬剤を散布した場合には、散布実績を記入する。

7. 結果の取りまとめ

農薬名	調査時期	区	葉枯病		(炭疽病)
			発病茎率 (%)	発病度	発病茎率 (%)
展示区 オンリーワン フロアブル	散布直前 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			
	散布5日後 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			
	散布10日後 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			
(対照) 慣行薬剤	散布直前 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			
	散布5日後 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			
	散布10日後 (月 日)	1区/2区	/	/	/
		平均			

(1) 薬害および薬斑の状況：

(2) 期間中の薬剤散布実績：

5. 考察

6. 普及性

作物名 きく（小ぎく） 対象病害虫 オオタバコガ・アブラムシ類・（白さび病）

展示公所名：中央農業改良普及センター（地域）

1. 展示薬剤名：アクセルキングフロアブル

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍数
トルフェンピラド	12.0%	発生初期	4回以内	1,000倍
メタフルミゾン	19.0%			

2. 普及展示のねらい

オオタバコガおよびアブラムシ類に対する防除効果を確認し、普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所 北上市

(2) 対象病害虫 オオタバコガ、アブラムシ類、（白さび病）

(3) 耕種概要 露地栽培の慣行法による

(4) 普及展示規模 展示区、対照区とも1a、2反復

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	処理量	その他
展示区 アクセルキング フロアブル	8月	1回	200～300 ^{リットル} ／10a	処理時期はオオタバコガ 発生予察結果を考慮して 判断
対照区 慣行薬剤	8月	1回	使用基準による	

(6) 調査月日、方法

ア 調査は散布直前および散布7日後、14日後の3回とする。

イ 1区100茎についてオオタバコガによる茎生長部食害数を調査する。

ウ 1区10茎についてアブラムシ類の生長部付近の寄生虫数を調査する。

エ 1区20茎について中位葉5枚の白さび病の発病の有無を調査し、発病葉率を算出する。

オ 葉害及び葉の汚れを観察する。

カ 調査期間中、他の薬剤を散布した場合には、散布実績を記入する。

4. 展示成績

農 薬 名	調査時期	区	オオタバコガ	アブラムシ類	(白さび病)
			茎生長部 食害茎数 (本)	寄生虫数 (頭)	発病葉率 (%)
展示区 アクセルキ ングフロア ブル	散布直前 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			
	散布7日後 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			
	散布14日後 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			
対照区 慣行薬剤	散布直前 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			
	散布7日後 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			
	散布14日後 (月 日)	1/2	/	/	/
		平均			

(1) 薬害および薬斑の状況：

(2) 期間中の薬剤散布実績：

5. 考察

6. 普及性

作物名 きく（輪ぎく）

対象病害虫 アブラムシ類

展示公所名：二戸農業改良普及センター

1. 展示薬剤：コルト顆粒水和剤

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍数
ピリフルキナゾン	20.0%	発生初期	4回以内	4,000倍

2. 普及展示のねらい

アブラムシ類に対する防除効果を確認し、普及性を検討する。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所 九戸村
- (2) 対象病害虫 アブラムシ類
- (3) 耕種概要 露地栽培の慣行法による
- (4) 普及展示規模 展示区、対照区とも1 a、2反復
- (5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	処理量
(展示) コルト顆粒水和剤	発生初期	1回	100～300 $\frac{g}{10a}$
(対照) 慣行薬剤	発生初期	1回	使用基準による

(6) 調査月日、方法

- ア 調査は散布直前および散布7日後、14日後の3回とする。
- イ 1区10茎についてアブラムシ類の生長部付近の寄生虫数を調査する。
- ウ 薬害及び葉の汚れを観察する。
- エ 調査期間中、他の薬剤を散布した場合には、散布実績を記入する。

7. 結果の取りまとめ

農薬名	調査時期	寄生虫数			1茎あたり寄生虫数
		1区	2区	平均	
コルト顆粒水和剤	散布直前 (月 日)				
	散布7日後 (月 日)				
	散布14日後 (月 日)				
(対照) 慣行殺虫剤	散布直前 (月 日)				
	散布7日後 (月 日)				
	散布14日後 (月 日)				

- (1) 薬害および薬斑の状況：
- (2) 期間中の薬剤散布実績：

5. 考察

6. 普及性

作物名 飼料用トウモロコシ 対象病虫害（雑草） 畑地雑草

展示公所名：中央農業改良普及センター（地域）
：奥州農業改良普及センター

1. 展示薬剤名 アルファード液剤
(有効成分：トプラメゾン3.6%)
2. 普及展示のねらい
抑草範囲の広い生育期処理剤の効果と普及性を検討する。
3. 普及展示方法
 - (1) 展示場所
 - ア 金ヶ崎町
 - イ 花巻市
 - (2) 対象病虫害 : 畑地雑草
 - (3) 耕種概要：種子の相対熟度は、地域で黄熟期到達のものを選定
：施肥等は、県の牧草飼料作物栽培利用指針に準じる
 - (4) 普及展示規模
 - ア 金ヶ崎町 1.0ha
 - イ 花巻市 1.0ha
 - (5) 散布時期、量、方法

	処理時期	処理量 (/10a)	使用方法
展示区：アルファード液剤	とうもろこし3～5葉期 (収穫45日前まで)	薬液：100～150ml 希釈水量100～150L	雑草茎葉散布
対照区：農家慣行の薬剤散布	—	—	—

※土壌処理剤との体系処理とする。

※対照区はワンホープ乳剤やバサグラン液剤などの予定

- (6) 調査月日、方法
 - ア 除草効果
生育期処理剤散布前に、各区1 m²のコードラート枠を数箇所設置し、出現する雑草種類（イネ科、広葉）と株数を調査する。生育期処理剤の散布後、20日を目処に設置した1 m²のコードラート枠内に残存する雑草の種類（イネ科、広葉）、株数を調査する。
 - イ 薬害の有無
薬害の有無、症状等について、残草の調査時に観察、記録する。

4. 展示成績

	処理前		処理約20日後		
	種類	株数(株/m ²)	種類	株数(株/m ²)	薬害の有無・程度
展示区					
対照区					

5. 考察

6. 普及性

※記載項目は、中央農業改良普及センター（県域）が必要に応じて加除することができる。